Well-Beingの「準快楽説」

伊集院　利　明

要旨：本論は、well-being の快楽説は誤りであるが、快楽がなければ well-being は一切成り立たないとする説を「well-being の準快楽説」と名付け、この説の正当性の一端を示す。本論は、二つのかなりもっともに見える前提と、もう一つの、論争をまきおこすような前提（本論文ではＰ３と呼ばれる）を立てれば、そこから、準快楽説が説得的となることを示し、同時に、Ｐ３が、今後の well-being 研究において一つの議論の焦点となるべきものであることを示す。

キーワード：well-being、快楽説、「準快楽説」、欲求充足、快（楽）

1　序

Well-being（以下 WB）の快楽説は誤りであるが、快楽がなければ WB は一切ない。これ（以下に示すＨ２）が WB についての私の立場である。本論は、この見解の正当性の一端を示す。

より詳しく本論で行うことを限定すると、次のようになる。

まず、快楽（快）であるが、これをかなり広い範囲に取り、happiness のうちの意識化される側面、諸情動の肯定的感情価ないしはそれに伴う肯定感、肯定的ムードに含まれる肯定感なども含めた全体（少々大雑把な言い方をすれば feel good と言い得るもののすべて）を、快として扱い、それをＨ（＝hedone）として記号化する。そして、ＨとWB との関係についての立場として次の二つを掲げる。

Ｈ１　WB はＨのみにより成り立つ[1]。

Ｈ２　WB はＨのみによって成り立つのではないものの、Ｈを不可欠とし、Ｈ×Ｘあるいは H+H × X によって成り立つ[2]。（ＸはＨに外在的な何らかの要因であり、Ｈ２は、Ｘに該当する要因が一つ以上存在するとする立場である。Ｘにはいる項目の候補としては、欲求充足、客観的リスト説のリスト内のＨ以外の項目、人間的本質の完成、真実性などがある。）

本稿の立場は、Ｈ２であるが、本稿では、Ｈ２を論じる上でいくつかの前提をおく。

Ｐ１　「Ｈ（や反Ｈ）を持たない生物は WB（や反 WB）にあずからない」という直観（これを「Ｈ生物直観」と名づける）が正当であるということがかなりもっともらしい。

Ｐ２　経験機械の直観は正しい。（ここで言う経験機械の直観とは、Nozick の当初の提起にあるものではなく、「全く同じ心的状態の人間が二人いて片一方の生が経験機械の生でもう一方の生が現実の生であるならば、かなりはっきりと後者の方が WB において勝る」というものとする。（Lin 2016a を踏襲しつつ、「かなりはっきりと」を追加する。（追

加しないとfreebie problem（e.g. Buscicchi 2022）がつきまとうことになる。））

Ｐ３　Ｈ１を否定することと、それにもかかわらず、ＨがなければWBは一切ないと主張することとの間に、何ら齟齬や不都合はない。

本論文で論じることは、「Ｐ１，２，３を認めるならば、Ｈ２を認めざるを得ない」ということに限定される。（ただし、Ｐ１に関しては、それを否定する立場についても、一定の検討を加える。）

Ｐ１，２，３の前提の事情について述べておく。まず、Ｐ２は、Ｈ１説（快楽説）論者以外のすべての論者が認めるものである。Ｐ１の扱いには、微妙なところがあるが、現在の倫理、価値をめぐる諸議論において、Ｐ１が暗黙の前提として扱われていると述べることにはもっともらしさがある。（鳥、魚を食べることや、工場畜産の是非が論争対象となるのに対して、レタスやダイコンを食べることの是非が論争対象とならないことの理由として、まず考えられるのがＨ生物直観であろう。）ただし、Ｐ１の正当性については次節でもう少し詳しく事情を見直しておく（そのうえで、第３節以下でも一定程度議題とする）。以上の二つの事情に対して、Ｐ３はかなり議論を呼び得る。心的状態であるＨが不可欠であると主張することと、心的状態以外のものがWBに影響を（道具的にではなく）与え得るということを認めることとがなぜ両立するのか、特に、Ｘが価値的なものの場合、なぜＨがある場合にのみその価値が有効になるのか、こうした点について、その理論的根拠の如何が重い問題として問われることになると思われようからである。私はそうした問いかけがしごくまっとうなものであることを認めたうえで、それに解答を与えていくつもりであるが、今回はそれを先送りにし、上に掲げた主題に本論の狙いを限定する。（Ｐ２を前提する以上、本論で焦点となるのは、Ｈ２のうちの、ＨがなければWBは一切あり得ないという主張である。）

Ｈ２が正しいとすると、（Ｈ１以外にも）極めて多くの説（客観的リスト説、ほとんどの主観説）が誤っていることになる。それでもＨ２の範囲に属するものとしては、私の説以外にも、Feldman2004, Sumner 1996, Kagan 2009, Kraut 2007といった、有力論者たちの説として知られているものが含まれることになる。暫定的に本論では、Ｈ１を「快楽説」、Ｈ２を「準快楽説」と呼んで扱っていく[(3)]。「暫定的に」というのは、Ｈ２の中に入るものには、かなりの幅があり、Ｈ２のくくりは大雑把すぎるものだからである。

Ｐ１，２，３からＨ２を論じることについて、注目しておいていただきたいのは、この設定においては、Ｈ２に対して、Ｈ１の最大および第二の論敵となる、経験機械の議論と、「豚の哲学論」が使えないということである。これは、反快楽説論者たちに快楽説の最大の欠点であると考えられているものを気にせずに、快楽説のうまみを生かすことができることを意味する。そのような好都合な状況を作り出しているのが、Ｐ３である。（Ｐ３を前提とすれば、Ｐ２を認めても、Ｘが価値的なものであってもＸが独立に加算的にWBに算入されると考える必要がなくなる。）逆に言えば、上に述べた本論の戦略整理自体が、従来の論にはない形で、WB哲学が何を論じることに力を入れるべきなのかについての、一つの方向性を提示していることになる。快楽説の魅力（哲学の伝統上の実績がそれを示している）にもかかわらず快楽説を阻んできた、上にあげた二つの要因が取り払われた時、WBと快楽との関係についての問題状況、付置が、どのような相貌を見せることになるのか、その最大の焦点がＰ３であること、それを示すことが本論（が成功した場合）の最大の成果であるとさえ言い得るかもしれ

ない。

WB研究についての私の方法論的立場について、ひとこと述べておく。実は、Ｐ３を前提にした場合でも、Ｐ１、２からＨ２に至る道はそれなりの難儀を要する。これは、主には、かなり多くの重要な場面において研究者たちの直観が合致しないことが起こることに由来するが、私見によれば、そうした状況をもたらしている最大の要因が、WB概念自体のあいまいさである（cf. 伊集院2021）。さらには、それと関連性をもつ次の問題がある。我々が自分の人生についての重要な選択をする際に、たとえ思考実験的状況で自分のことだけ考えればよいと言われていても、我々は必ずしも自分のWBだけに繋がるような選択をするとは限らず（cf. Smuts 2018）、知らず知らずのうちに他の価値を大切にしてしまう。（自分の子供や他人のことをおもう場合も同様である。）私見では、こうした事情を考えるならば、WBを研究する上では、WBだけを単独で扱うのではなく、生の有意味性や道徳との関係を視野に入れ、そうした諸価値の関係性、全体構造がいかに描けるかの点で、どこまで説得力のある理論が提示できるかを争うかたちで、いわばある程度トップダウン的な視点を導入して考察するよりないように思える。（これに関連して、Ｐ２についても、その正当性をＨ１論者たちに直接的に納得させることは（その逆も）おそらく不可能であり、究極的には、Ｈ１論者の言うWBと反Ｈ１論者の言うWBのどちらにより重要性があるかを考えるというかたちで決着をつけるよりないであろうと考えている。）――にもかかわらず、本論はあくまでも（今述べた意味では）ボトムアップ型の議論を展開する。それによっても、それなりに説得力のある論が構成可能であろうと考えるからである。

２　「Ｈ生物直観」を認めるとどうなるか

先に述べたように、Ｐ１を受け入れることについては、もう少し事情を詳しく見ておく必要がある。

そのためにもまず、Ｐ１自体は、Ｈ生物直観の正当性を確固とした形で認めるものではないのだが、それを確固とした形で認めてしまうとどうなるのかを見ておきたい。――簡単に言うと、客観的リスト説や、典型的な主観説はかなり苦しい立場になる。

Ｈ生物直観が文字通りに正しいとすると、Ｈにあずからずに欲求を持ったり、達成、知にあずかる生物は、WBにあずかることができないことが自動的に帰結してしまう。それと、達成や、知など、あるいは欲求充足がそれ自体としてWB価を構成するとする立場を両立させることは困難である。

反Ｈ２陣営側には、いくつか対応法が考えられる。しかしまず、今述べたような生物の存在が想像できないという応答は無理があるだろう。欲求ならQuinn1993のradio man的生物や、Berridge(e.g. Berridge 1996)以降の脳神経科学で言われているところの「liking」と「wanting」について、前者なしに後者のみを持つような生物が想像可能である。また、達成なら、蜂が快楽を持たずに単に本能ではなく計算能力を持って見事な巣を作っている姿が、そして、知ならば、快楽のないコンピュータのような（ただし意識はある）生物が想像可能である。

Invariabilismを放棄するのはどうであろうか(つまり、一つのWB説がすべての生物に当てはまることを否定して、例えば人間のWBには○○説が当てはまるが、ネズミのWBには××説が当てはまるとする)。Variabilism（それの可否をめぐる論争については、Lin 2022など参照）の理論的問題点（例えば、なぜ人間では○○でネズミでは××なのかを説明するために、◇◇が人間で

は○○となり、ネズミでは××というかたちをとると答えてしまうならば、◇◇でWBを説明するinvariabilismになってしまう）を仮に無視するとしても、そもそものＨ生物直観が、生物全体に関しての、つまり、すべての生物についての直観であることに注意せねばならない。この文脈ではvariabilismを持ち出すだけでは解決にならない。――variabilismについてもうひとこと言うと、それを仮に認めるとしても、あまりにも原理的説明のめどが立ちそうにない、単に自論を固持するためだけに作られるような説は、説と言えるかどうか自体に疑問符がつくであろう。例えば、「Ｈのない生物の場合は、達成は何らWBにならないが、Ｈのある生物の場合は、Ｈの機能が発揮されずＨが全く実現されない場合にも、達成があればWBになる」というような説は、ご都合主義的で、ad hocなものに見えるかもしれない。

そこで、Ｈ生物直観を前提としない場合も含めて（その意味でＰ１を一定程度見直すことも含めて）反Ｈ２側がとり得るより有効な戦略を考えてみたい。どちらにしても、Ｈ生物直観あるいはＰ１を否定してしまう（あるいはそれに近い形をとる）か、Ｐ１を一定程度（あるいは弱勢化したうえで）認めながら、論を覆す手を考えねばならない。そこで次の三つが浮かび上がる。Ｎ１は前者に､Ｎ２，３が後者に分類できるであろう。[4]

・Ｎ１　Ｈ生物直観を真っ向から否定し、それに近いもののみ認める。
・Ｎ２　Ｐ１を弱勢化した形でのみ認める。
・Ｎ３　Ｐ１を（一定程度）認めながら、先に言及した「Ｈのない生物の場合は、○○は何らWBにならないが、Ｈのある生物の場合は、Ｈが全く実現されない場合にも、○○があればWBになる」を正当化することを考える。

Ｐ１については受け入れる前に事情を検討しておかねばならないと述べたが、そのことに一番関わるのがＮ１である。まず、次の直観の正当性は、確固としたものとして扱わざるを得ない（また、そのように扱われている）。――「意識のない生物は一切WBにあずからない」（これを、以下Ｓ生物直観と呼ぶ[5]）――Ｎ１として考えられるのは、Ｓ生物直観のみを認め、Ｈ生物直観を否定するという道である。菜食と肉食との対比が問題にされる際に、問題となるのは、Ｈ直観に見えるかもしれないが、しかし、そうした場合にも必ずしもＨ直観がそれとして明確に表明されているわけではないのではあるまいか。本当に認められるべきなのは、Ｓ直観のみなのではないか。そしてそもそも、Ｈを欠いた単なる意識にも一定の価値があるのではあるまいか。――これは、真剣に取り組まねばならない問題である。ただ、Ｈを欠いた単なる意識自体にも一定の価値があるという立場は、必ずしも多数派の立場ではないであろうし、また、あるとした場合にも、その価値がWB価値と言えるのかが問題となるであろう以上、Ｈ２の否定としてＮ１を持ち出す場合には、一定の議論上の負荷を負うことになるであろう。Ｎ１については、主に、第３節で取り上げることになる。

Ｎ２としては、我々がＨを欠きながら達成、欲求等の能力を持つ生物を想定することは不可能ではないが、そのようなものが現実には存在しないのではないかということを梃に論じることが考えられる。我々がＨを欠く生物にWBがないと考えるのは、実は、我々がＨ能力を持つ生物以上の生物でなければ、WBがないと考えるからなのではなかろうかという考え方である。――しかし、欲求、達成などの能力がＨ以上の能力であると本当に言えるのかは、かなり疑問符がつくところであり、またこの種の階層性を認めることとＨにあずからずにそれ以上の能力にあずかる生物が存在するということ自体がそもそも矛盾しないかという疑念が残るだけ

に、こうした路線では、Ｈ２に対抗するためには、欲求充足、達成などがそれ自体として善であることを支持する材料となる論を提示する責任をそれなりに負わなければならないことになるであろう。（つまり、Ｎ２は、Ｐ１によって、反Ｎ２側にとって状況が厳しくなるその傾斜を一定程度緩めること以上のことはできないことになろう。（であるから、次節以降の論がそのままＮ２に対しては反論となる。もともとＰ１自体が強い要求ではない。））

一方Ｎ３は、「コーヒーを出さずに紅茶しか出さないような店など行く価値がないが、コーヒーを出す店は、（たまたま豆が品切れなどの事情で）コーヒーを出さない場合も紅茶を飲みに行く価値がある」と同じような、むちゃな言い分に見えるかもしれない。しかし、店についてのいまの言い分自体が実はむちゃでないのかもしれない。例えば、コーヒーをいれる能力がある人にしか出せないような紅茶の味というものがあるかもしれないからである。そして今の例をＨ能力と欲求充足に適用したような論が（異なる議論文脈においてではあるが）実際に提起されている（Heathwood 2019）。欲求を、単に行動をもたらすだけの欲求と、genuine attraction sense における欲求 (desire)（以下 gaD）（これはＨ能力を必要とするであろう）、すなわち、対象を魅力的（等）ととらえることによる欲求（詳しい定式化は ib. 674-5）に分け、後者の充足だけが WB の要因となるとする路線である。これは、欲求充足説にまつわるいくつかの諸難問に対する解決策として注目されているものであるだけに、重要な選択肢となる。（これについては、主に第３節で扱う。）

――以上の状況をにらみながら、欲求充足、達成等々自体に（Ｈと独立に）WB 価があると言える根拠があるのかを考察していこう。第３節で欲求充足を取り上げ、第４節以降でそれ以外について取り上げる。

なお、主観説は、Ｈ１との合体を図るという路線がある。これは実際に欲求充足説について、Heathwood 2006, 2007が展開している路線である。この路線が成功するとするならば、それは、後で扱うように、実はさらにＰ２と接合する形に変換させることが可能なものだが、その場合の変換後の説は、Ｈ２の範囲内に収まる。

もう一つ、Ｈの重要性について、本論の本来の趣旨を少し超える範囲で、少しだけ述べておきたいのは、Ｈ生物直観が正しいとすると（正しくないとしてもおそらくは）、例えば、（典型的な）欲求充足説は、欲求の能力が全く働いていない時間帯のＨの価値の扱いに困ることになるのではないかということである。後追いで欲求の対象になるとすることでこの問題をすり抜けようとすることは、かなり困難に思える。後追いで対象になるとどうして言えるのかなどが、問題になるように思えるからである。さらに付け加えておくと、そもそも典型的な欲求充足説は、経験機械内のＨの価値を十分に扱いきれない（経験機械内の WB 値を低く算定しすぎることになる）ように思える。（なお、このことからすれば、Ｈ２路線は、Ｈ×ＸのＸがゼロの場合に備えて、Ｈ×ＸよりもＨ＋Ｈ×Ｘを採っておくことが好ましいと言えそうである[(6)]。この問題についてより詳しく論じることは別の機会に期したい。

３　呪い議論（欲求充足に向けて）

欲求充足説[(7)]に対する反論の一つとして知られている死海リンゴ議論（欲求が実現したとたんに本人にとって関心の持てないものになってしまう場合をどう考えるか）をＨとの関連を明確化しながらさらに先鋭化させたバージョンを作ってみたい。「ミダスの死海リンゴの呪い」を考えてみよう。ミダス

王に呪いをかけ、欲求が実現される（desire that pのpが客観的に実現される）たびに、ミダスがそれに対する一切のHを持てないようにしてしまう。――人間はもちろん快自体を欲求することがある（ただしこの呪いでは、その欲求は満たされないことになる）が、しかし、明らかに他のものを様々に欲求しそれを現実に実現させていくことがある（I desire that p and pのpが客観的に成立するかどうかが問題になるということが、経験機械議論に対する欲求充足説の強みとなっていることを忘れてはならない）。

これはまさに呪い以外の何物でもない。あなたがミダスを呪おうしたらこれはかなり良い呪いではなかろうか。そしてあなたがもしミダスについての物語を作るとしたら、あなたはミダスがひどく不幸な状態に陥ったと描写するであろう。彼にとって何のよいことがあろうか。

物語と書いたが、まさにそのような物語は、娯楽映画の中に実在する。ハリウッド大衆娯楽映画の『パイレーツ・オブ・カリビアン』シリーズの第一作で、タイトルはまさに「呪われた海賊たち」である。海賊たちがまさに今述べたのと同じ呪いにかけられる。物語では海賊はひどくみじめな状態にあるものとして描かれる。そして、彼らはそのような状態から逃れることに必死になる。さらに（重要なことだが）彼らは呪いのせいで不死にされているのだが、迷うことなく、そうした状態のまま不死の生をおくるよりも、そこから逃れて（平均でせいぜい残り50年に満たない）Hある生を得ることを希求し、そのために必死になっている。――そのような商業主義娯楽映画は哲学的議論の根拠とはならないと思われるかもしれない。しかし、物語内容そのものを直接的に哲学的議論の論拠として使うことができないという点でならば、芸術映画や文学も同じであるということは、現在進行形の哲学では標準的了解である。そして、この場合には、商業主義的娯楽映画にはむしろ、哲学にとって一つの決して小さくはない利点がある。多くの人々の目にふれ、彼らの反応が見られる（それによっていわば「観察哲学」的な成果が得られる）ということである。この海賊たちは呪われた後も多くの略奪を成功させその意味では自分たちの欲求を充足させている。自分たちがやろうとしたことを次々と成し遂げている以上彼らはそれなりに自分たちにとってよい状態にあるはずなのであるから、彼らに対する呪いを過大視する描き方はおかしいという批判が多く寄せられたなどということはない。もちろん、荒唐無稽な娯楽映画である以上、細かな矛盾など言いたてても意味がないということは差し引いて考えるべきであるが、それでも、いま問題になっているのが物語の最も基本をなす枠組み設定である以上、これの持つデータ的価値をあまり軽んじてはならないはずである。海賊たちがいくら多くの欲求を「充足」させていても彼らにWBはない。（だから永生を捨ててもHのある残り50年の生を選ぶことは正しい。）（永生の場合、少しでもよいことがあれば、無限大をかければ有限な時間の善を上回ってしまうことにも注意されたい。）これが多くの人々の当たり前の直観である。伝説のミダスが金を口にしても何にもならないように、何の喜びもない形で欲求が充足しても何ら得ることがないと考えざるを得ないのだ。

これに対する反論は容易でないと思われる。１、Hであるならば欲求充足を伴うものの方か好ましい。――これはＨ１に対する反論になってもＨ２に対する反論にはなっていない。２、欲求が実現することは自己実現としての価値である。――問題はそれが、価値であるのかではなく、本人にとっての善であるかである。自己実現自体に伴う充実感はHに含まれるものであり、そうしたものも一切除外して考える必要があることに注

意しなければならない。草木がその本来のあり方を実現しても、なんらWBはない（WB研究界での同意事項）。である以上、何らかがその本来のあり方等を実現させても、それ自体がWBの実現になるとは考えられない。３、欲求を、充足と同時的な欲求に限定すれば解決するのではないか。――同時的なものとするだけでは何ら解決にならない。今自分が食べているリンゴそのものを食べる欲求に突き動かされながらかつ、そして、食べていることが分かっていながら、まったくHが伴わないという姿は、Berridgeらが描く、「liking」なしに「wanting」のみに突き動かされる中毒患者と極めて似通った姿である。他方で、欲求を同時的なものに限定したうえでさらにそれに「liking」の働きによりHが実現された姿を考えるのならば、Ｈ２とは矛盾しないことになってしまう。

――Ｐ１の存在のため反Ｈ２側に、欲求充足のそれ自体としての価値を示す必要性が課せられている議論状況では、反Ｈ２側の材料として、とても説得的なものを見いだすことができない。

前節で取り上げたＮ１，３についてはより丹念に扱っておく必要があるが、先に結論を言えば、それらも上の論に対しては説得力がない。（先に述べたようにＮ２については特に扱う必要はない。）

Ｎ３の、欲求充足説の欲求をgaD（genuine attraction senseにおけるdesire）に限定するという路線は、欲求充足説に向けられる諸疑念に対する有効性を持っていると期待されているだけに、有力と思われるかもしれない。しかし、ここの文脈に限定して言うと、上の議論に対しては反Ｈ２側の状況を好転することに何らならないと思われる。欲求がgaDであっても、そしてそれがHの能力を必要とするものだとしても、その対象が実現されるということが、客観的事態の成立にすぎない以上は、それ自体では、何ら、Hが生まれることを保証しない。（ちなみに欲求充足を、事態が生じたことを本人が信じているという意味での主観的充足に置き換えたところで、それとHの成立とは同じではない。Heathwood2006, 2007はこの点で混乱していると思われる。）呪いはそのままであり、また（ここではこちらが重要なのだが）呪いが呪いとして力を持っているということ自体を減じる材料が特に示されたことになっていない。（補足すると、上にあげた海賊たちは、どう見てもgaDを持って対象を追究している。対象を手にしたときにHが得られないだけである。）そして、gaDで行動している以上それが得られる時にはHが得られると主張してしまうならば、それを梃に論じてもＨ２を否定することにはならない。gaDで行動しているときにHが得られるという主張も同様である。gaDによってHが得られた状態を、gaD（あるいはその充足）自体によってWBが得られた状態と取り違えないように注意していただきたい。gaDで行動するならばそしてそれが充足されるならば本人にとってよいはずであることの根拠は、特にどこにも見当たらない。

Ｎ１からの反論としては次のようなものが考えられる。（ただし、ここで出す議論は、本節の局面に特に限定したものと言うよりも、Ｎ１対Ｈ２の対立の全体に関わるものとなるのだが、論述の都合上、ここで扱うことにさせてもらったことを断らせておいていただく。）――あなたの生がのこり40年だとして、これからのその間あなたを哲学的ゾンビ状態にすると悪魔に言われたら、それはとてもおぞましきことだろう。しかしもし、Hをまったく欠くが意識のある状態にすると言われたら、それもおぞましいが、しかし哲学的ゾンビ状態よりはましと感じるだろう。ならば、Hを全く欠くが意識のない状態は、あなたにとってのよさがその分だけあるはずだ。もしHに満ちた90年の生と、Hを欠く

が永遠の生のどちらを選ぶかと言われたら、後者を選ぶのではなかろうか。――これは Kriegel により提題されているもの（多少変更を加えた）だが、しかし、彼自身がその個所で認めているように、この直観はかなり怪しい。我々が H を完全に欠く状態のことを十分に想像し得るとはとても思えないし、そもそもそんな状態になったら、自分の生について care するということが成り立たなくなるように思える[(8)]。さらに、上の海賊たちは、H を欠く永遠の生と、H のある（しかもひょっとしたら反 H の方が大きくなるかもしれない）残り50年の生の選択で断固として後者を選んでいる。先にも述べたように、これに基づく「観察哲学」の成果を過大視してはまずいにしても、いまの論が提起するものの方にそれを覆すほどの力がないことも確かであろう。（意識がそれ自体としては WB 的に善とは言えないことを示す他の説得力のある論として、Heathwood 2021(9-11) も参照されたい。）

Ｎ１、３も上の論に対する反論には特にならない。

呪い議論の説得力を裏付けるために、もう一つの重要な材料を示しておきたい。これは、ひょっとしたらあまりにも概観的な議論に見えるかもしれないが、それなりに強い説得力を持つものとして扱われてしかるべきであろうと思われる。それは、そもそも欲求充足説（の典型的バージョン）よりも、それをＨ２に置き換えた形のもの（つまりＨ２の「Ｈ＋Ｈ×Ｘ」あるいは「Ｈ×Ｘ」のＸに、客観的欲求充足をおく説であるのだが、これを「欲求充足Ｈ説」と呼ぶこととしよう）の方が、説得力が強いように思えるということである。欲求充足説に対してはかなりいくつもの反論が提起されている。しかし、それらのうちの少なくともかなり多くのものは、欲求充足説を欲求充足Ｈ説に改訂しさえすれば、簡単に解消するめどが立てられる。私が念頭においている諸問題は、scope problem (remote desires), 死海リンゴ (changing desires) 問題、quirky desires 問題（のうちの少なくとも、芝生数え的事例や、「Parfit 的薬物」事例）、欲求していなかったことが起こったのにそれに満足してしまうケースの問題、不幸になることを欲求するケースの問題である。紙数の都合上、詳しい説明を省かざるを得ないことになって恐縮だが（省く理由については、もう少し後の方の記述も見ていただきたい）、これらの問題をご存知の方には、（反論が出る余地がないなどと言うつもりはないものの[(9)]）、欲求充足Ｈ説への置き換えがこれらの極めて多くの問題に対する、比較的簡単な解決になりそうだという主張に、一定のもっともらしさがあることは、比較的簡単に了解していただけるのではないかと期待する。もちろん、Ｈ×欲求充足などという掛け算をすることにいかなる権利があるのかということに対しては、疑念が起こるであろう。しかし、その問題はまさにＰ３の問題である以上、「Ｐ３を前提とするならば、欲求充足説よりも欲求充足Ｈ説（Ｈ２に属する）の方がだいぶ説得力がある」という主張の説得力（本論の趣旨にとって重要なもの）ならば、それによって傷つけられることがない。――もちろん、欲求充足説がそれぞれの問題ごとに提起してきている諸解決策が功を奏さないということをこの短い論文で示すことは不可能である。しかし、多くの問題を根こそぎに一挙に解決する方針とは異なる分割統治的戦略（Heathwood 以外のほとんどの論者はその路線と言って差支えがないと思えるが）による戦況状況が、少なくともはた目から見る限りではかなり混沌としたものに見えるという現時点において、総合一括統治がうまくいきそうなめどが立つとするならば、それが、欲求充足説の根本の問題地点、あるいは、ばらばらに扱われてきた諸問題の共通の根を、言い当てているという可

能性を、かなり真剣に考えざるを得ないはずである。

断っておくと、この方向での総合一括統治路線は、必ずしも私の発案とは言いきれない。今しがた言及したHeathwoodの路線がこれに近いからである。(こうした事情から、欲求充足説の諸問題が欲求充足H説でいかに解消するのかの説明は、Heathwoodの論述内容とかなり重なる(ただし本節末の付記と注10を参照)ことになるが、これが、先に説明を省いたことの一つの理由となる。)Heathwood 2006, 2007は、欲求充足説をデフォルトの客観的充足バージョンから主観的充足バージョンへと改訂し、主観的欲求充足をH的なものへと改訂することで[10]欲求充足説に対して提起されてきた諸難点の多くが、一挙に解決されることになるとする。――この記述に対しては、第一に、HeathwoodはH２を否定してH１的立場に立っていることが指摘されるだろうし、第二に、Heathwoodの路線は、欲求充足説の諸難点の解消の点では魅力的であるものの、彼の論では欲求充足説が快楽説に対して持っている経験機械の議論に対する強みが完全に失われる以上、とても賛同できないと言われるかもしれない。――いまの二つの問題は(本稿の立場にとっては)実質的に同じ問題である。HeathwoodはＰ２を否定する立場に立つが、Ｐ２,３を認める形に改定するならば、上にあげたような、H２路線になるからである。つまりH(Heathwoodによれば主観的欲求充足と同じ)×客観的欲求充足をWBの構成要因とする説である。もちろん、Ｐ３を認めない人にはこれは採用できない。それでも欲求充足説の諸難題に対するHeathwoodの方策に一定の説得力を感じる一方で、彼の論では経験機械の論に対して対応できないのでどうしても支持できないと考えるという人は、H２、Ｐ３を真剣に検討することが最も合理的である。

付記――ただし私は快を主観的欲求充足に還元する彼の戦略がうまくいっていると思っていない(その意味では、欲求充足説の諸難点を解消するためには、主観的充足バージョンに改定するとしてもそれでは不十分で、どちらにしても、H×欲求充足を主張するしかないと考える)。成功していないと考える理由は単純なものである。快を成立させる肯定的態度に欲求と一定程度の共通性があるにせよ、それと「欲求充足」という言葉で了解されている「欲求」とが同じものとは考えにくいからである。主観的欲求充足も、先に見たように、それだけでは快と結びつかない。そして、Berridge以降の「wanting」と「liking」との区別を考えるならば、その区別とHeathwoodの説とをうまく接続することにかなり無理があると思われる。

4　達成、他

Fletcher 2016(123)はHが全くない場合にも達成はWBの要件になると考えることができるとする論拠として、次のものを提示する。ピアニストがコンサートで見事に難曲を弾き切ったが全く満足感、肯定感を持てない。それでも弾き切るという達成をしたことが彼女にとって善であることは明瞭ではないかというのだ[11]。

私にはこの主張は端的に反直観的なものに映る。もちろん、達成が何等かの価値であることは確かであるが、本人がよい感じを持つということと何ら連携を持たないものが、どう本人にとってのWBとなるのかが不思議に思う。――この局面では単なる直観のぶつけ合いによる不毛が起きかねない。

私の側からは、Fletcherの直観の危うさ、錯覚のおこる要因について論じることができる。第一に、達成は道具的な価値が大きい(それと最終的価値との区別がつきにくくなりがちとなる)。しかも単に称賛されると

いったものではなく、その人のあり方の形成、展開へとつながり、それが大きなよろこびに繋がっていく可能性がある。第二に、現実の生では達成はほぼいつもそれなりの満足感を伴うのであり、全く満足感を伴わないような達成を想像することはそれほど楽ではない。第三に、達成の時点でのHを差し引くだけではなく、その過程のHも差し引いて想像せねばならない（人間は達成自体よりも過程において満足感を得るようにできている）が、それをすることはとても容易とは言えない。そもそも、何のHもない状態で何らかの達成に至りつくことは現実の人間には困難という以上におそらくは不可能であるため[12]、H差し引きの想像作業は極めて困難である。――とは言え、Fletcher側も、私の直観が錯覚であると考えられることの材料を提示してくるのかもしれない。ただ、どんなことが言えるのか、私自身には想像がつかない。

論をより実質的に進めるための議論を展開しよう。

まず、Hがそれ自体として善であるということを支える根拠にはそれなりに、かなり強いものがある。H生物直観の存在である。Hがそれ自体として善であるという直観がかなり強いものでなければなぜH生物直観がこれだけの支持を得ているのかの説明がつかない。正確に言うと問題なのは、H生物直観ではない。H生物直観をH以上生物直観やS生物直観に置き換えたとしても、Hにあずかり得る生物ならば、Hにあずかるということがそれ自体でWBにあずかることの要件となるのであり、それだけでWBにあずかるための十分条件を満たしているという直観にはかなり確固としたものがあるとみてよいはずである。そうでなければ、極めて多くの論者によって、動物の快苦が問題になる（matters）ものとして当たり前のように扱われているということが理解しがたくなろう。そして、このようにHの価値に対して強力な「データ」があるのに対して、達成のそれ自体としてのWB価値を証拠立てるような同様のデータは（Fletcherのような直観の断定の存在以外には）思い当たらない。反H２側は大きな論証責任を課されることになる。

それ以上に（そしてかなり決定的に）重要と思われるのが。前節の議論との関係である。達成と客観的欲求充足（のうちの多くのもの）とは、かなり似通っている。もちろん客観的欲求充足のうちにはそうでないものもあるが、かなりのものは、そして特に欲求充足説の論拠となりそうなものは、達成的なものである。呪いがかけられている状態では、達成と外延的に一致するような事象にWBの実現があるとはとても見えない以上、呪い議論が達成にも適用されることになるはずである。客観的欲求充足も、達成も、それ自体ではWB価を持たない。

さらにこの論は、同じ理屈で、達成以外の客観的リスト説のリスト項目にも適用されることになる。その項目は、多くの人々が実際に欲求するところのものと外延的に重なるからである。（欲求充足説と客観的リスト説が、説内容の対極性の一方で、外延的にはこうした関係にあることは知られている（e.g. Heathwood 2021(30)）。

ここで、もともと本稿の議論がＰ１を前提するものであったことを思い返していただきたい。Ｐ１はＨ生物直観に対する一定の改定、差し引きは許容するものの、それに対してはそれなりの論証責任を課すものである。そして、Ｐ１に対するＮ３も説得力がない（Ｎ１については、すでに前節で述べたとおりであり、Ｎ２については、第２節で述べた通りの事情である）。Hの能力を前提とするgaDであっても、充足の時点で充足自体にHが伴わなければ、WBに貢献しないことを見てきた。ならば、同じように達成の

営みがHの能力を伴うかたちで遂行されても達成自体において、Hが伴わなければWBに貢献しないことになる。また達成段階における達成ではなく、達成していくこと自体を取り上げるとしても、H能力とともになされる達成の（行為遂行過程の）営為がH自体を伴わないならば上と同じことになるはずだし、H能力が（例えば達成過程で）Hを起こしてしまうならば、それを材料に論じてもH２を否定することはできない。

Ｐ１に伴うこうした議論状況下においては、達成等に関して反Ｈ２側の提示するものは説得力がなく、本節冒頭で提示した直観の説得力は脆弱なものであると言わざるを得ないのだ。

５　よりソフィストケイトされた論その一

Lin 2014(141-145) は、友があるということはH抜きにもそれ自体としてWB的に善であるとして次のような議論を展開する。――Aは現実を生き友がいる。Bは経験機械の中にいて本当の友はいない。この二人が完全にHを持っていない時間帯どうしを比較するならば、Hを持っていない時間期間中のAのWBは、友があるという分だけ、Bのそれより上回ることは明らかであろうという議論である。――なお、これを扱うにあたって、Hと友に論を絞る以上、A、Bの生には、その二つ以外の善い点は何もないということにしておかないと混乱を招くということをあらかじめ述べさせておいていただく。

私にとってこの議論が厄介に感じられる理由は前節で扱ったFletcherの議論の場合と同様のものである。私にはLinの直観が全く共有できないので、この議論に説得力を感じる人の気持ちがよく理解できない。というわけで、Linの論に対する第一の言い分は、そもそもAのその時間帯のWBは（友とH以外のものでWB的に善となるものがないのなら）Bのそれと全く同じにしか見えないということであるのだが、ここでも、直観のぶつけ合いという不毛な事態を避けるための論を何とか編み出さねばならない

まず前段階として、あなたが一億円のダイヤモンドを持っていることをとてもうらやむべきだと思い込んでいるとする。Cは持っていてDは持っていない。二人がダイヤを持っているか持っていないかを完全に意識していない状態の二人の生のWBに何か違いがあるであろうか。これには戸惑うかもしれない。それでは死後の5分前に両者が自分がダイヤを持っているかどうかを完全に忘れているとし、完全に同じ心的な状態であるとする。この5分間のWBに違いがあるとはとても思えないのではなかろうか。それならば、先のAとBに関しても、死ぬ直前に全く同じ心的状態であるならばWBは同じであると考えるのが合理的であろう（私には、C、Dとの比較などしなくても同じにしか映らないが）。ならば、生の中間点の5分ないしは１時間のHを欠いた時点での比較でAの方が上に見えるとすれば、それは、友があることによってその後のさまざまな可能性が開けることからくる、錯覚ではなかろうか。

さらに踏み込んだ形で論を展開させよう。

Aと、現実の世界で友達のいないB´とを比較するならば、二人ともがHを欠いている時間帯においても心的状態が全く同じということは、現実上は、まずない。友があることによって、人間の生の構築の仕方は大きく変わってくる。

そこで、心的状態を全く同じにして、友達がいるという客観的な事実自体がWBを本当に左右するかを（それがまさに問題になっている事柄であるはずである）考えてみよう。

欲求充足説に対する反論としてremote desireについての反論がある。あなたが、旅行中に列車の中で出会って親しく話し合った人がある人と結婚したがっているという話を

する。あなたはその願いが実現することを強く欲求する。しかし、あなたが全く関知しない遠い場所でそのことが実現されても、その客観的事態は、それ自体では何らあなたのWBにつながらない。――この論は欲求充足説に対する論としてそれなりに力を持ったものであり、欲求充足説側は、何らかの対応を迫られると考えられる。

ではそれと比較して次の場合はどうであろうか。

Eの友人はすでに死亡しているが、Fの友人はまだ生きている。しかし、EもFも死の直前の３か月の間、友人が死んでしまっていると思い込んだままでいる。さらに二人とも同時に、自分の念願のプロジェクトが実を結んだためその分のプラスと友が死んだと思っているマイナスとで、H的状態は二人ともプラスマイナスゼロの状態とする。EとFのWBは同じに見えるであろうし、また上のremote desire問題の事例と突き合せればそれは確信に変わるであろう。

この事情は、死ぬ直前であるか、そうでないかで差が起きるはずのないものである。死ぬ直前以外での直観が（多少）あやふやになるとするならば、それが、錯覚を生み出す諸事情（友があることの道具的価値、友がいる場合にHがない場合においても引き起こす心的状態のあり方がその後に大きな影響を及ぼすこと）に基づいていると考えられることは明らかであろう。友がいるということは、それ自体では、WB的にプラスになると考えるいわれはないのだ。

６　よりソフィストケイトされた論その二

Ｈ２はXにあたるものが、Hと連動することで、あくまでも掛け算的にのみWBに繋がるのであって、決してX自体として加算はされないとするものである。これに対して、かりにHを欠く生が、全体として、WBを欠くとしても、それと、Xにあたるもの、例えば、達成が、足し算的に加算されることとは、「Hが少ない場合には、達成（あるいはXに入り得る他のもの）は加算されないが、Hの量が多い時には足し算的に加算されることになる」と考えるならば、矛盾せずに両立するのではないかと、考えられるかもしれない。（Lin 2016b(337) に提起されている考え方だが、Lin自身がこれを支持しているのかどうかはそこでは明言されていない。）

しかし、これは計算合わせのためのad hocな人工的式に見える。なぜこのような変動が起こるのかの原理の説明、解明を欠けば、説得力が弱いのではなかろうか。

Ｈ２が提起する「Ｈ×Ｘ」の図式は、快を欠く生の事情を説明するための式として、はるかにすっきりしている。もちろんなぜHという心的状態であるものとその他のものとをかけ合わせる権利があるのかの説明が不可欠ではないか、と思われるであろう。しかし、本論は当初断ったように、Ｐ１，２，３を前提とした場合に何が言えるかを考察することを議題としている。いましがたの問題は、Ｐ３の正当性を示すことによって回答されることになる。

それでは、確かに、そのような限定された議題を論じる上では説得力があることになるが、提起された案と、Ｈ×Ｘ路線とは、同じように原理的説明を欠くのであって、その点では同じということになるのではないかと思われるであろう。そこで、本論文の本来の守備範囲を少し踏み越える形で論を補っておきたい。

まず、それでも、理論的単純性自体が一つの利点となることは主張することができよう。さらに、次のことが決定的に重要であると思われる。

WBが全くゼロの人間を想定する。次にそこから、ケースAではHだけが少しずつ増えていくとする。ケースBではH. 達成が

少しずつ増えていく（ただしHと達成との間に何らかの有機的連関があるとする）。BにおけるHの増加ペースはAの場合と同じとする。――もちろん、H１論者は、AとBのWBの増加に何ら違いがないと考える。しかし、P２（と３）を認める人間の目からすれば、Bの方が増加量が大きいようにしか見えないであろう。P２を支持する人が、快が少ない場合には経験機械の中と外では差がないと考えること自体が、かなり想像しにくい[13]。

増加の初期段階から明確な違いがあるように思える。ソフィストケイトされた提起に対するH×X論の持つ単純性、自然さの利点を考えれば、H２側の説得力の方がはるかに強いと言えるであろう。

７　P３の位置づけ

P１，２，３を前提とするならば、H２の説得力はかなりゆるぎないものとなる。

このことと並んで、第１節でも述べたように、前提となったP３の正当性の如何こそが、WB研究が力を入れるべき重要な議題となることを示すことが、本論文の重要な企図となっている。そのことについてごく簡単にまとめておきたい。

私は数学についてほとんど知識がないが、聞いた話によると、数学の世界でabc予測が関心を集めているのは、それが証明された場合には、それを前提とすれば、数学のかなり多くの重要な難問が比較的容易に解決されてしまうことが解明されているからなのだそうである。

それと少し似たことがWBにおけるP３についても言えるかもしれない。次のような整理ができそうである。

もしP３が正しいのなら、その場合には、まず、本論で論じたように

・欲求充足説の強みを保持したまま、欲求充足説の弱点と考えられている問題の極めて多くを解消するかたちで、欲求充足説を欲求充足H説へと転化することが可能となる

が、それだけでなく

・客観的リスト説は、その強みを生かしながら、H＋H×X（XにH以外のリスト項目を入れる）説へと転化することで、客観説の最大の弱点とされてきたalienation問題を解消するめどが立てられる[14]

・perfectionismについても（当然のことながら）同様のことが成り立つ

・快楽説は、その強みを引き継ぎながら、P２を受け入れ快楽説の最大の難関をクリアーするH２説へと転換することができる

ということが言えることが考えられる。――私自身は実はさらには、こうだとすると、対立すると考えられてきた諸説の、ある種のcvergeによる、WB山登頂への道が開けることすら期待できるのではないかとさえも思っていることを付け加えておきたい。

もちろん、これは一つの可能性を示したものにすぎない。それでも、P３が、考察に値する重要なテーマであることについては、一定程度の説得力を与え得たのではなかろうか。

付記――実を言うと、私見によれば、P３問題を解決するための（とりあえずの）糸口は、かなり目につきやすいところにころがっている。快の態度説を梃に真理条件を組み込むというFeldman2004の路線である。快についてのFeldman的態度説を否定する論者（私を含む）にも、このアイデアは、応用可能ではなかろうかと思えるし、さらには、H２のXに他の要件を組み込もうとする論者にも重要な足場を提供するものであるように思われるからである。

注

（１）より正確にはHマイナス反Hにより成り立つ

となる。以下のものも同様。

(2)「×」の記号は、必ずしも単純な掛け算でなくてもよい。その意味では、「H × X」と「H + H × X」の区別にはあまり意味がないとも言える。

(3) Feldman 2004は自説が快楽説であるとしているが、彼自身が認めている(187)ように、これは呼び名の問題である。同じ心的状態であるのに様々な可能世界との対応関係でWB値が変わる(ib. 181-2)とする説を、たいていの論者は「快楽説」と呼ばない。

(4) ここにあげるものは、言うまでもなく、私が考え得る限りのものであり、その意味では、P1を認めない、ないしは弱勢化する立場に立つとどうなるかについての本論の考察は暫定的な性格が残ることとなる。

(5) Sはsentienceだが、この言葉は、快苦を感じることを指す場合とより広く意識を指す場合があるが、WB研究では主に後者の意味で使われる。

(6) ただし注2参照。ちなみにFeldman 2004はXがゼロのときWBがゼロになるという立場ではない。

(7) 本節の論は、必要な変更を加えればvalue充足説などにも適用される。

(8) Kriegel forthcoming自身の分析による。ただし、Kriegelはcareの問題については、care自体はH的に肯定的なことも否定的なことも中立的なこともあるので、Hを欠いているものにもcareは可能なのではないかとしている。しかし、care自体がその意味でH中立的かどうかという問題と、何かを肯定的にcareすることがH的に肯定的にでないかたちでなされ得るかとは別問題であろう。なお、Kriegelは他に、Hもあるが反Hがそれを上回る生と、哲学的ゾンビの生とでは、前者が選ばれるはずだという論を提示しているが、(Kriegel自身が承知しているように)これは、H1に対する反論になってもH2に対しては効力がない。

(9) 死後の充足が全くプラスにならないという直観は、欲求充足説論者の間でも少数派でないであろう。

(10) 実際には、Heathwood 2007は、主観バージョンにするだけでH的なものへの改定が果たされるものと解しているようである。しかし、先にも見たように、主観的にするだけではHとの接合はまだできていない。

(11) 実際にはFletcherは議論自体の中では、達成のゆえなのかそれとも欲求充足のゆえなのかはどちらの可能性もあるとしているが、本論の論旨には響かないと判断される。なお、これと似た方向のものとしては、Sarch 2012 (445), Wall, Sobel 2021 (46-7)。

(12) ahedonia症は快楽がひどく減退するだけの症状である。

(13) ただし、苦痛の悪はそれ自体として大きい。苦痛、不快と、快とを、シンメトリカルには扱えないということは、すでに広く了解されているものと理解する。

(14) 私は、Hは本質的にalienation問題に対する一定の(限定的な)免疫を持つと考えるが、それについての議論は、別の機会に譲りたい。

文献

・Berridge. K. 1996. Food Reward : Brain Substrates of Wanting and Liking. *Neuroscience and Behavioural Review, 20*,1-25.

・Buscicchi L. 2022. The Experience Machine. *Internet Encyclopedia of Philosophy*.

・Feldman F. 2004. *Pleasure and the Good Life*. Oxford Clarendon

・Fletcher G. 2016. *The Philosophy of Well-being : An Introduction*. Routledge.

・Heathwood C. 2006. Desire Satisfactionism and Hedonism. *Philosophical Studies, 128*,539-563.

・Heathwood C. 2007. The Reduction of Sensory Pleasure to Desire. *Philosophical Studies, 133*, 23-44.

・Heathwood C.2019. Which Desires Are Relevant to Well-being. *Nous, 53*, 664-688.

・Heathwood C. 2021. *Happiness and Well-being*. Cambridge U.P.

・伊集院利明 . 2021. Well-being哲学研究の現在地点 . 伊集院編『「幸福」を考える――東洋、西洋、実証研究』(愛知大学人文社会学研究所) , 10-30.

・Kagan S. 2009. Well-being as Enjoying the Good. *Philosophical Perspectives, 23*,253-272

・Kraut R. 2007. *What Is Good and Why*. Harvard U.P.

・Kriegel U. forthcoming. The Value of Consciousness to the One Who Has It.

・Lin E. 2014. Pluralism about Well-being. *Philosophical Perspectives, 28*,127-154.

・Lin E. 2016a. How to Use the Experience Machine. *Utilitas, 28*,314-332.

・Lin E. 2016b. Monism and Pluralism. In Fletcher ed. *The Routledge Handbook of Philosophy of Well-being*(Routledge.) 331-341.

・Lin E. 2022. Well-being, Part 2: Theories of Well-being. *Philosophy Campass, 17*, e12812

・QuinnW. 1993. Putting Rationality in Its Place.

In Frey et al. ed. *Value, Welfare, and Morality*. (CambridgeU.P.). 26-50.
・Sarch A. 2012. Multi-component Theories of Well-being and their Structure. *Pacific Philosophical Quarterly, 92*, 439-471.
・Smuts A. 2018. *Welfare, Meaning and Worth*. Routledge.
・Sumner L. 1996. *Welfare, Happiness, and Ethics*. Oxford Clarendon.
・Wall S., Sobel D. 2021. A Robust Hybrid Theory of Well-being. *Philosophical Studies, 178*,2829-2851.